

# 『ワンダー・ブック』において子どもの年齢が 設定された物語

—年少向け「不思議な水差し」と年長向け「キマイラ」—

熊田 岐子

## はじめに

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) は、1852年に出版した『少年少女のためのワンダー・ブック』(*A Wonder-Book for Girls and Boys*)の序文において、「子どもの理解を得るために、調子を下げなくてはならないと常に考えているわけではなかった」“the Author has not always thought it necessary to write downward, in order to meet the comprehension of children” (4)と述べている。これまで『ワンダー・ブック』に取められた物語の内容に関しては、一般読者向け作品と比較しながら論じられてきたものの、ホーソーンが序文で綴ったこの言葉の真意を探るために、その英文レベルが着目されることはなかったようである。そこで、熊田(2009)では『ワンダー・ブック』に収録されている「黄金に変える手」(“The Golden Touch”)と一般読者向け作品『七破風の屋敷』(*The House of the Seven Gables*)の比較検証を行い、その結果ホーソーンの子ども向け作品と一般読者向け作品はまったく同じ筆致で描かれたわけではないということを述べた。

それを踏まえて、本稿では『ワンダー・ブック』の年少の子どもたちに語られた「不思議な水差し」(“The Miraculous Pitcher”)と年長の子どもたちに語られた「キマイラ」(“The Chimæra”)を扱い、その対象年齢による英文レベルの差について検討を加えていきたい。

## 1. 「不思議な水差し」と「キマイラ」の内容

この章では、英文レベル分析の一助とするために、各物語で対象とされる子どもたちの年齢と物語の内容を確認し、さらに物語が与える印象について述べてみたい。

### 1.1 「不思議な水差し」の対象年齢とその内容

「不思議な水差し」の聞き手となるのは、ユースタス・ブライト (Eustace Bright) の聴衆では年少の子どもたちのグループに属するスウィート・ファーン (Sweet Fern)、カウスリップ (Cowslip)、スカッシュ・ブラッサム (Squash Blossom)、ダンデライオン (Dandelion) の4人である。

The fact is, the younger part of the troop have found out that it takes rather too many of their short strides, to measure the long ascent of the hill. Cousin Eustace, therefore, has decided to leave Sweet Fern, Cowslip, Squash Blossom, and Dandelion, at this point, mid-way up, until the return of the rest of the party from the summit. (117; underlines mine)

彼らの実年齢はというと、彼らの一人であるカウスリップが「6歳の子、カウスリップ」“Cowslip, a child of six years old” (8) と前もって明記されていることから、6歳あたりの子どもたちがこの年少グループと考えてよさそうである。

物語の主な登場人物は、4名—ピレーモン (Philemon)・バウキス (Baucis) 夫婦と、夫婦の前に旅人として現われるクイックシルヴァー (Quicksilver) と背の高い年上の男性—である。この物語は3部構成であり、タイトルの通りどんなについても中身がなくなる不思議な水差しが中心となっている。また、善人には良いことが起き、悪人には悲惨な結末が訪れるというテーマが設定されており、子どもたちの道徳観を形成するのに役立つ物語と言ってよいだろう。

第1部は、変わった身なりをしたクイックシルヴァーと彼より年上の男性が、旅人としてピレーモン・バウキス夫婦の元に現れるところから始まる。この貧しくも善良な老夫婦は、村に住む人々に犬をけしかけられたり、ひどい仕打ちを受けた旅人

たちをささやかな夕飯とおいしい牛乳でもてなす。その夕飯の最中、クイックシルヴァーの杖の仕業により、水差しに入った牛乳がついでもついでもなくならないという不思議な出来事が起こるのである。

第2部では、クイックシルヴァーと年上の男性の不思議な力により、彼らに意地悪をした人々の住む村は湖の底に沈み、さらにその村人たちは人間として生きる資格がないとの理由から魚に変えられてしまう。それに対して、親切に彼らをもてなした老夫婦の「共に生き、共に死にたい」という願いはかなえられることが約束され、高い場所に建ったみすばらしい家は大理石の邸宅に変わる。

最後の第3部においては、その後この老夫婦はとても幸せな生活を送り、人間としての人生が終わった後には、ピレーモンは樫の木に、バウキスは菩提樹の木になり、疲れて立ち寄った旅人を迎え入れる様子が描かれている。そして、そこに立ち寄った旅人たちは、不思議な水差しから思う存分に牛乳を飲むことができたとの内容で物語は締めくくられる。

「不思議な水差し」は村人が魚に変えられてしまうという残酷性を持ちながらも、人類愛と夫婦愛にあふれた温かい物語であり、小さな子どもでもなじみやすい内容である。

### 1.2 「キマイラ」の対象年齢とその内容

「不思議な水差し」が語られた後に、ユースタス・ブライトと年長の子どもたちが山を登り始める様子が描かれており、「キマイラ」は年長の子どもたちに語り聞かせるという設定であることがここで明かされている。

Advising Cowslip, Sweet Fern, Dandelion, and Squash Blossom, to sit pretty still, in the spot where he left them, the student, with Primrose and the elder children, began to ascend, and were soon out of sight among the tree. (139; underlines mine)

年長グループの子どもたちの年齢は、プリムローズは13歳 (87)、ペリウインクル

(Periwinkle)は10歳(59)で、彼女たちはユースタス・ブライトを困らせる常習犯であり、自我が発達している様子がそれまでの4つの物語の「序」や「物語のあと」で描写されてきた。したがって、年長グループは10歳から13歳程度だと考えられる。

物語の主な登場人物はキマイラを退治するベレロポーン (Bellerophon) と彼を支える少年、3人の村人、ベレロポーンの相棒となるペーガス (Pegasus)、そしてキマイラであり、物語は4部構成である。第1部ではベレロポーンと少年の友情、第2部はベレロポーンとペーガスの友情、第3部はベレロポーンの勇気と知恵、第4部にはベレロポーンと少年の絆と、ベレロポーンとペーガスの絆が描かれている。

第1部は、イオパテース王 (Iobates) の命を受け、ペーガスを自由に扱えるという馬勒を持ったベレロポーンがピレーネ (Pirene) の泉に現れる場面から始まる。ペーガスなんか現れないと村人たちに散々嘲笑されても、ベレロポーンは、そこで出会った健気な少年に慰められ、勇気づけられながら、ペーガスを待つことができる。さらに、ここではベレロポーンがキマイラを退治するに至った経緯やピレーネの泉の由縁が細かく説明されている。

第2部では、ペーガスがピレーネの泉に降り立つ。ベレロポーンはペーガスに馬勒をつけ、ペーガスと共にキマイラ退治へと旅立ち、彼らはキマイラを退治するまでの日々を一緒に過ごして信頼関係を築く。

第3部では、ベレロポーンとペーガスが、3つの頭—1つ目は大きな蛇、2つ目は獅子、3つ目は山羊—を持った獯猛な怪物キマイラが住むリュキアの谷へ向う。苦戦を強いられながらもベレロポーンはペーガスを励まし続け、ついにベレロポーンはキマイラに対して勝利を取めるのである。

最後の第4部では、ベレロポーンとペーガスがピレーネの泉に少年に会いに行き、勝利の報告をする。それを聞いた少年はとても喜び、ぼろぼろと涙を流すのである。そして、ベレロポーンに親愛の情を抱いているペーガスは、馬勒が外されても逃げることなく、ベレロポーンと共にピレーネの泉を去っていくのである。

「キマイラ」はプリムローズが頬を蒸気させて聞き入るような、息もつかせぬ冒険物語であるが、それだけではなく、登場人物などの描写が詳細であり、人物の感情も豊かに描かれたホーソーンらしい繊細な作品に仕上がっている。

### 1.3 「不思議な水差し」と「キマイラ」が与える印象

ここでは、以上述べてきた2つの物語の性質を中心にして、読み手(聞き手)に与える印象をまとめていきたい。

#### 1.3.1 登場人物について

「不思議な水差し」には不可思議な力を持つ人物が二人登場するが、魔法使い二人では子どもが理解に苦しむ可能性がある。しかし、片割れのクイックシルヴァーは、「不思議な水差し」以前の物語にも登場しており、ここでの聞き手の子どもたちにとって目新しい人物ではない。例えば、「ゴルゴーンの首」ではベルセウスを助け、「こどもたちの天国」では不思議な箱を持って現れている。つまり、クイックシルヴァーという存在を読み手(聞き手)となる子どもたちはすでに認知しているため、「不思議な水差し」でも子どもたちがこの人物を理解するのに負担はかからないということである。その一方、「キマイラ」は古典神話に基づいてはいるものの、『ワンダー・ブック』の他の5作品に通じるものは見当たらない。つまり、「キマイラ」は読み手(聞き手)の子どもたちにとってすべてが新しい物語であり、さらには登場人物も多いので、「不思議な水差し」よりも子どもたちの理解力が必要となるのである。

#### 1.3.2 描写について

「不思議な水差し」は村人を総体的にとらえており、個々の人物には触れていないが、「キマイラ」は村人とのかわり、村人個々の性格が細かく描かれている。「不思議な水差し」は特定の人物やクイックシルヴァーの杖、水差しの説明が繰り返されており、物語の舞台は主に老夫婦の家の中であり、大きな変化はない。一方、「キマイラ」はピレーネの泉、空の上、リュキア、キマイラが住む谷底にまで舞台が移動していく。加えて、「キマイラ」では、小さな子どもには少々わかりづらいリュキアのイオパテース王などの古典神話に忠実な具体名が記されているのである。

#### 1.3.3 主題について

「キマイラ」では少年の存在がベレロポーンを勇気づけ、忍耐させるのに一役買っ

ているが、「不思議な水差し」では老夫婦が村人をいさめることも、邪悪さを取り除くように鼓舞する様子も見られなかった。老夫婦は村人をそのまま放置し、クイックシルヴァーと年上の男性は村人を魚に変えてしまうだけである。つまり、「キマイラ」では少年を通して、一人では成し遂げられない事柄も他人の励ましにより完遂できることが示唆されており、その意味では、「キマイラ」は「不思議な水差し」から発展を遂げた物語であるとも言えるかもしれない。

## 2. 「不思議な水差し」と「キマイラ」の英文レベル比較

先入観に左右されないように意識したものの、前章で述べたように2作品を比較してみると、ホーソーンは子どもたちの年齢に従って物語の難易度を設定したと考えざるをえない。この章では、1章で述べた内容的な差異に比例して、英文レベルでも難易度の差が表れるかを詳細に分析してみたい。英文レベル測定のために、リーダビリティはFlesch Reading Ease (以下FRE) とFlesch-Kincaid Grade Level (以下FKGL)<sub>2</sub>を用い、語彙はJASET8000を利用した語彙指数<sub>3</sub>を用いることにより語彙レベルを算出し、その数値を見ていく。

### 2.1 リーダビリティ

第1章で述べた物語の設定年齢から、「不思議な水差し」と「キマイラ」では4～7歳程度の差があってもおかしくはないが、リーダビリティを計測すると実際には次のような結果である(表1)。

表1 「不思議な水差し」と「キマイラ」全文のFREとFKGL

	「不思議な水差し」	「キマイラ」
FRE	71	69.9
FKGL	8.1	8.6

理解しやすいFKGLを見ると、「不思議な水差し」は8.1年生であり、「キマイラ」は8.6年生向けとなっている。つまり、リーダビリティにおいては0.5年生差であるものの、

ほぼ差異はないのである。

### 2.2 語彙レベル

次に語彙レベルを計測するが、まず各物語の全文のtokensの語彙指数は「不思議な水差し」は71.827、「キマイラ」は79.980であった(表2)。

表2 「不思議な水差し」と「キマイラ」全文の語彙指数

	「不思議な水差し」	「キマイラ」
indexes	250.356	267.073
tokens	71.827	79.980

「不思議な水差し」の総語数は6666語であり、「キマイラ」は8052語であるため、語数が少ない「不思議な水差し」に「キマイラ」の語数を合せて再度語彙指数を測定した(表3)。

表3 「不思議な水差し」と「キマイラ」冒頭約6666語の語彙指数

	「不思議な水差し」	「キマイラ」
indexes	250.356	253.322
tokens	71.827	76.323

条件を揃えた表3を見ると「不思議な水差し」と「キマイラ」のtokensの語彙指数には4.5程度の差がでているものの、実際に4～7歳程度の差があるとは断定できない。つまり、「不思議な水差し」より「キマイラ」の方が約1500語多い語数であっても、対象年齢差とリーダビリティ・語彙の数値は比例せず、さらに1.3で論じたような読み手の印象とも数値は一致しないという結果になったわけである。これは一体どういうことなのであろうか。

リーダビリティ面の差が各物語になくとも、語彙レベルに差があると読み手の印象に一致すると考えられるため、次に、語彙レベルをさらに詳しく検証していくことと

する。

### 2.3 語彙レベルの詳細

語彙レベルを測定するために、語彙指数を使用してきたわけだが、語彙指数はJASET8000分析プログラム(以下v8an)に基づいて算出しているため、v8anで提出される数値を確認する。表4～7は、各物語の語彙レベルを記した表である。indexesは見出し語数を、tokensは総語数を表し、それぞれの%は全文の中で占める%を表している。また、level番号はJASET8000に基づいた語彙レベルを示す。

語彙レベルを測定するために用いた語彙指数は、level1の数値を除いて計算されている。そこで、計算の範囲に入っていないlevel1に注目したい(表4、5)。level1のtokensの%は、「不思議な水差し」78.128%、「キマイラ」76.59%である。つまり、level1は機能語が多く含まれるため、level1の数値が高い方が語彙レベルが低いという判断になる。したがって、「キマイラ」の方がわずかながらlevelの高い語彙が用いられているということになる。

表4 「不思議な水差し」level 1～5

	level 1	level 2	level 3	level 4	level 5
indexes	532	189	101	37	47
%	42.122	14.964	7.997	2.93	3.721
tokens	5208	459	222	50	79
%	78.128	6.886	3.33	0.75	1.185

表5 「キマイラ」level 1～5

	level 1	level 2	level 3	level 4	level 5
indexes	537	213	112	54	67
%	38.522	15.28	8.034	3.874	4.806
tokens	6167	476	233	94	104
%	76.59	5.912	2.894	1.167	1.292

次に、表6、7のover8に注目する。Over8はlevel8以上の単語が振り分けられるのだが、「不思議な水差し」は4.245%、「キマイラ」は5.229%である。つまり、「キマイラ」は「不思議な水差し」よりも難易度の高い語が1%程度多く使われているということになる。

表6 「不思議な水差し」level 6～proper nouns

	level 6	level 7	level 8	over 8	cont. forms	non-words	proper nouns
indexes	49	44	37	213	2	3	9
%	3.88	3.484	2.93	16.865	0.158	0.238	0.713
tokens	83	72	44	283	21	10	135
%	1.245	1.08	0.66	4.245	0.315	0.15	2.025

表7 「キマイラ」level 6～proper nouns

	level 6	level 7	level 8	over 8	cont. forms	non-words	proper nouns
indexes	41	40	45	262	4	2	17
%	2.941	2.869	3.228	18.795	0.287	0.143	1.22
tokens	102	65	76	421	56	6	252
%	1.267	0.807	0.944	5.229	0.695	0.075	3.13

さらに、level1同様に指数計算からは外されている固有名詞 (proper nouns) を見てみると、「キマイラ」は3.13%であり、「不思議な水差し」の2.025%より多く使用されているのがわかる。以下にその固有名詞を並べた(v8anによって振り分けられた語のうち固有名詞と判断できないものは筆者が排除した)。

「不思議な水差し」の固有名詞

(prop) Baucis 46

(prop) Olympus 1

(prop) Philemon 55

(prop) Quicksilver 24

「キマイラ」の固有名詞

(prop) Bellerophon 96	(prop) Iobates 6
(prop) Chimæra 35	(prop) Lycia 7
(prop) Diana 1	(prop) Pegasus 80
(prop) Helicon 4	(prop) Pirene 14
(prop) Hippocrene 1	

\*固有名詞横の数字は各語の頻度

固有名詞と確認できる語は「不思議な水差し」では4語(合計頻度126回)に対して、「キマイラ」では9語(合計頻度244回)であり、「キマイラ」で使われた固有名詞は「不思議な水差し」の約2倍である。このように、自分たちには馴染みのない固有名詞の多さが子どもたちの理解に影響するというのは明らかである。つまり、リーダビリティ・語彙の数値から「不思議な水差し」と「キマイラ」の間に年齢差を見いだせなかったものの、ここで述べたようなlevel1、over8、固有名詞の3点が、「キマイラ」を難しく感じさせる理由と考えられるのである。

### 3. 『ワンダー・ブック』に収録された全物語から見る「キマイラ」

ホーソン研究家のマクファーソン (McPherson) は、「キマイラ」を「おそらくこれは自分のベスト・ストーリーだとわかっていて、ホーソンはワンダー・ブックの最後にそれを置いたのだ」“Knowing, perhaps, that this was his best story, Hawthorne placed it at the end of A Wonder-Book.” (McPherson 71) と位置付けている。ベスト・ストーリーが最も難しい英文が用いられた物語とは言いきれないが、「キマイラ」を『ワンダー・ブック』に収録された他の物語と比較させるのも、「不思議な水差し」と差別する手段の一つと言えるかもしれない。したがって、3章では他の4つの物語「ゴルゴーン的首」(“The Gorgon s Head”)、「黄金に変える手」(“The Golden Touch”)、「こどもたちの天国」(“The Paradise of Children”)、「三つの金のリンゴ」(“The Three Golden Apples”)と、「不思議な水差し」および「キマイラ」を比較する。

まずは6物語の全文のリーダビリティと語彙指数から始めたい。表8がその数値であるが、リーダビリティをFKGLから判断すると、「キマイラ」の8.6年生が最高値を示している。語彙指数も同様に、「キマイラ」の79.980が『ワンダー・ブック』では一番高い数値となっている。

表8 『ワンダー・ブック』各物語全文のリーダビリティと語彙指数

		ゴルゴーン の首	黄金に 変える手	こどもたち の天国	三つの金の リンゴ	不思議な 水差し	キマイラ
リーダ ビリティ	FRE	73.6	70.7	73.9	74.5	71	69.9
	FKGL	7.3	7.9	7	7.4	8.1	8.6
語彙指数	indexes	254.031	242.233	217.032	248.87	250.356	267.073
	tokens	66.837	69.062	56.349	66.075	71.827	79.980

より正確な数値を出すために、『ワンダー・ブック』で最少語数を示す「こどもたちの天国」(5741語)に語数を合せて、再度英文レベルを分析した(表9)。

表9 『ワンダー・ブック』各物語冒頭約5741語のリーダビリティと語彙指数

		ゴルゴーン の首	黄金に 変える手	こどもたち の天国	三つの金の リンゴ	不思議な 水差し	キマイラ
リーダ ビリティ	FRE	74	70.7	73.9	73.6	71.5	69.6
	FKGL	7.3	7.9	7	7.7	8.1	8.7
語彙指数	indexes	224.251	240.797	217.032	235.648	233.738	238.346
	tokens	61.257	69.043	56.349	67.592	68.411	71.973

条件を揃えても、やはり「キマイラ」のリーダビリティ (FRE69.6、FKGL8.7)と語彙指数のtokens71.973が最高値を示した。また、indexesの面でも「黄金に変える手」とほぼ変わらない数値を示していることから、『ワンダー・ブック』全物語のうち、「キマイラ」にはわずかながら最も難しく感じさせる英文が用いられているという結果も数値として表れたのである。

## おわりに

1章の内容的な差異から「キマイラ」は年長の子ども向けなのではないかと考えたものの、数値の上からは想定された年齢差は表れていない。しかし、2.3で述べたような理由からは「キマイラ」は「不思議な水差し」よりも年長向けの読み物であるということも理解されるはずである。また、この検証により、ホーソーンが『ワンダー・ブック』の最後に「キマイラ」を配置し、それを年長の子どもに聞かせるという形式を取った理由も英文レベルの数値から読みとれるだろう。今後は、英文レベルに加えて、ユースタス・ブライトの子どもたちに対する態度、そしてホーソーンの子ども観についても考察していきたい。

## 註

- \* 本文中の『ワンダー・ブック』からの引用は、*The Centenary Edition* Vol.7からの抜粋とし、そのページ数を引用文の括弧内に示した。
  - \* ホーソーン作品名および登場人物名は、『ナサニエル・ホーソーン事典』の高尾直知訳を使用させていただいた。
  - \* 『ワンダー・ブック』の英文レベル検証のために、The Baldwin Online Children's Literature Project (<http://www.mainlesson.com/>) のオンラインテキストを使用した。
- 1 『ワンダー・ブック』の「ゴルゴーンの首」(“The Gorgon's Head”)、「黄金に変える手」(“The Golden Touch”)、「こどもたちの天国」(“The Paradise of Children”)、「三つの金のリンゴ」(“The Three Golden Apples”)を指す。
  - 2 Flesch Reading EaseとFlesch-Kincaid Grade Levelの説明と算出法が、マイクロソフトのホームページで説明されている(「文書の読みやすさをテストする」<http://office.microsoft.com/ja-jp/outlook/HP101485061041.aspx>)。
  - 3 JACET8000分析プログラム(v8an)を利用した語彙指数は、岡崎(2008)を基に算出した。

## 引用・参考文献

- Hawthorne, Nathaniel (1972). *A Wonder Book and Tanglewood Tales*. Vol. 7 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 23 vols. Columbus: Ohio State UP.
- Laffrado, Laura (1992). *Hawthorne's Literature for Children*. Georgia: The University of Georgia Press.
- Mcpherson, Hugo (1969). *Hawthorne as Myth-maker*. Toronto: University of Toronto Press.
- 岡崎 弘信 (2008) .「e-ラーニングを利用したリーディング用教材の定量化に関する試論」『英語英文学研究第62集』創価大学英文学会 73-87.

- 熊田 岐子 (2009) .「ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の対象年齢—「黄金に変える手」を中心に—」『英語英文学研究第64集』創価大学英文学会97-109.
- ゲイル、ロバート・L (2006) .『ナサニエル・ホーソーン事典』高尾直知訳 雄松堂出版.